太子町文化財資料　第８集

斑鳩寺遺跡 I

―斑鳩寺納経所建築に伴う緊急発掘調査報告―

発掘調査地点位置図　(1:2500)

１９８９年１０月

太子町教育委員会

例　　言

1．　本書は、太子町鵤字斑鳩寺709 に所在する斑鳩寺遺跡第５次発掘調査の概要報告書である。

2．　発掘調査は、斑鳩寺の委託を受けて、昭和63年 8月に太子町教育委員会が実施したもので、太子町教育委員会社会教育課三村修次・田村三千夫が行なった。

3．　本書の執筆・編集は、田村が担当した。

4．　調査作業及び遺物整理作業には、下記の方々の協力を得ました。

柳生俊一・首藤聖・藤井実・小野八郎・小野斉・玉田喜作・藤井昭子・森崎宏子
岩村千穂・玉田弥生

目　　次

斑鳩寺遺跡の調査（第５次調査）

1．調査に至る経過　－－－－－－－－－－－1
2．調査の概要－－－－－－－－－－－－－－2
3．出土遺物の概要－－－－－－－－－－－－3
4．まとめ－－－－－－－－－－－－－－－－4
5．附載Ⅰ斑鳩寺の歴史を語る古瓦（一）－5
　　斑鳩寺の歴史を語る古瓦（二）－6

写真目次

写真１　発掘調査作業風景
写真２　トレンチ（西から）
写真３　トレンチ（東から）
写真４　トレンチ南壁面（西部）
写真５　遺物出土状況
写真６　トレンチ西壁面

挿図目次

第１図　発掘調査地点位置図－－－－－－－－－表紙
第２図　斑鳩寺遺跡発掘調査位置図－－－－－－1
第３図　トレンチ南壁土層断面図－－－－－－－2
第４図　第25層出土遺物拓本・実測図－－－－3
第５図　出土遺物拓本Ⅰ（軒丸瓦）－－－－－3
第６図　出土遺物拓本Ⅱ（軒丸瓦・軒平瓦）－4
第７図　出土遺物実測図－－－－－－－－－－－4

斑鳩寺遺跡の調査　　―第５次調査―

① 遺跡の所在地　　兵庫県揖保郡太子町鵤字斑鳩寺709

② 調査主体者　　兵庫県揖保郡太子町教育委員会

③ 調査担当者　　太子町教育委員会社会教育課　三村修次　田村三千夫

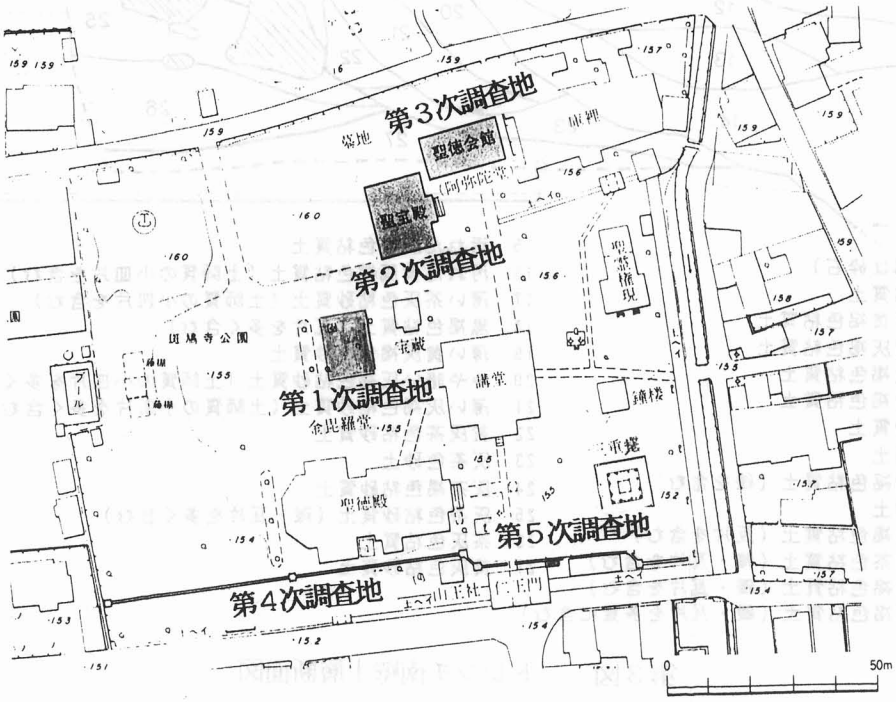
④ 調査期間　　昭和63年 8月28日から 9月 1日まで

⑤ 調査面積　　３㎡

１．調査に至る経過

斑鳩寺遺跡は太子町中心部の斑鳩寺に所在する遺跡で、林田川東岸の完新世段丘上の標高14～15mに立地する。斑鳩寺は法隆寺領播磨国鵤荘の中心となった寺院で、その創建は聖徳太子によると伝えられている。しかし、実際には平安時代後期頃に造られたと考えられ、その後、天文10（1541）年に失火により全焼するが、円光院昌仙らの手によって再建され、今日に至っている。

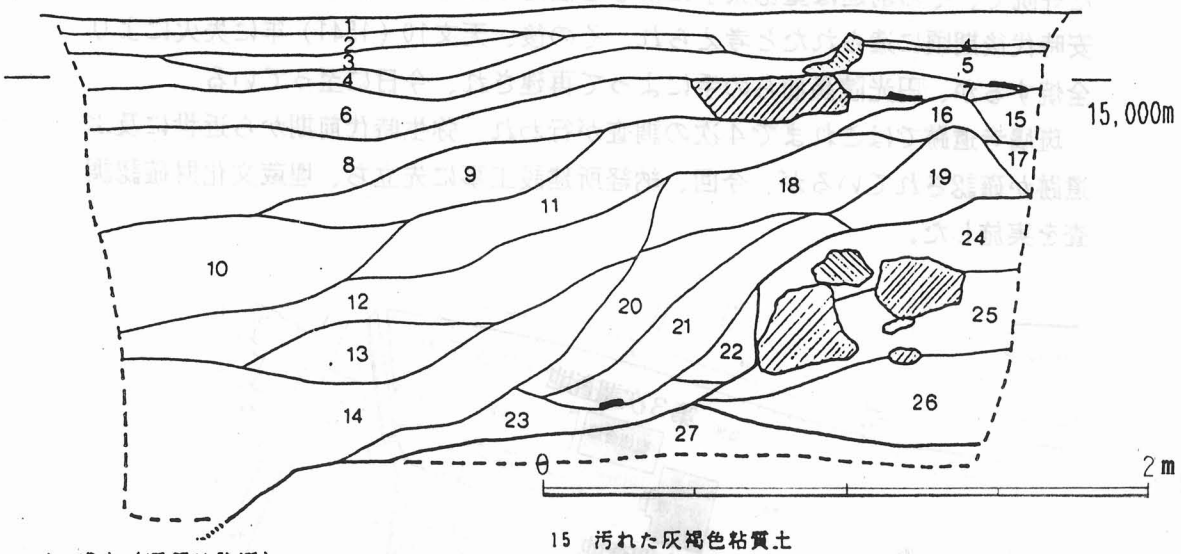
斑鳩寺遺跡ではこれまで４次の調査が行われ、弥生時代前期から近世に及ぶ遺跡が確認されているが、今回、納経所建設工事に先立ち、埋蔵文化財確認調査を実施した。



第２図　　斑鳩寺遺跡発掘調査位置図

２．調査の概要

仁王門東の休憩所の南に 3,0m× 1,0mのトレンチを設定し、調査を行った結果、地表から40cmの所で炭や焼土・瓦片を含む黒褐色粘質土（図 3の土層図の（18）、以下同）、60cmから建造物の基壇が見つかった。また、トレンチ東部には瓦・礫を多量に含む落ち込みが確認された。黒褐色粘質土（18）は厚さ24cmで、天文10（1541）年の大火に由来するものと考えられる。基壇は地山である黄灰色粘砂質土（27）上に３層80cm土を盛ったもので、版築はされていない。その位置から仁王門のものと考えられ、２層目の灰茶色粘砂質土（25）には多量の瓦が含まれる。トレンチ東部の落ち込みは黒褐色粘質土（18）上から始まり、深さ 115cm以上である。

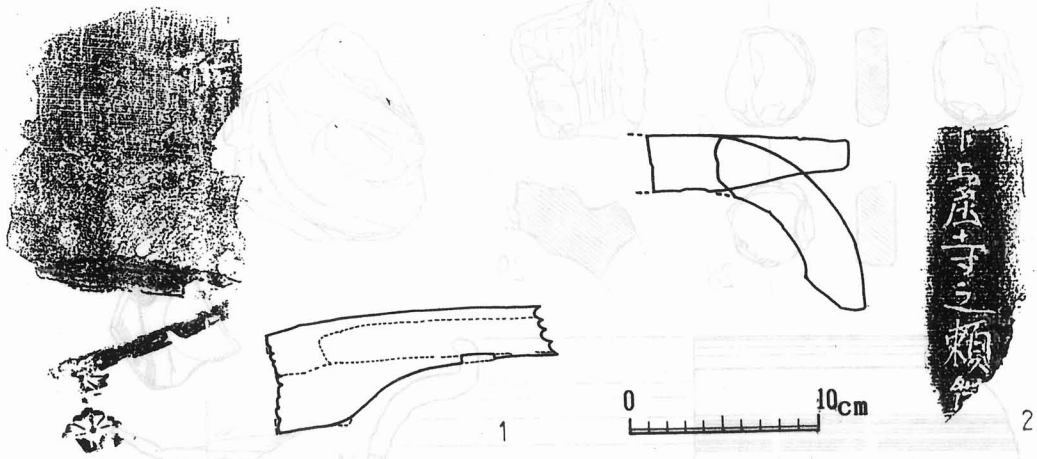


1　盛土（下部は砕石）
2　黄灰褐色粘質土
3　やや暗い灰黄褐色粘質土
4　やや暗い黄灰褐色粘質土
5　やや暗い黄褐色粘質土
6　やや薄い黄褐色粘質土
7　黄褐色粘砂質土
8　黄褐色粘質土
9　やや暗い黄褐色粘質土（礫を含む）
10　黄褐色粘質土
11　やや暗い灰褐色粘質土（瓦片を含む）
12　やや暗い黄茶色粘質土（礫・瓦片を含む）
13　やや暗い黄褐色粘質土（礫・瓦片を含む）
14　やや暗い灰褐色粘質土（礫・瓦片を多量に含む）
15　汚れた灰褐色粘質土
16　汚れた黄灰褐色粘質土（土師質の小皿片を含む）
17　薄い茶灰色粘砂質土（土師質の小皿片を含む）
18　黒褐色粘質土（瓦片を多く含む）
19　薄い黄灰褐色粘砂質土
20　やや暗い灰褐色粘砂質土（土師質の小皿片を多く含む）
21　薄い灰褐色粘砂質土（土師質の小皿片を多く含む）
22　黄灰茶色粘砂質土
23　灰茶色砂土
24　灰茶褐色粘砂質土
25　灰茶色粘砂質土（礫・瓦片を多く含む）
26　茶灰色粘質土
27　黄灰色粘砂質土

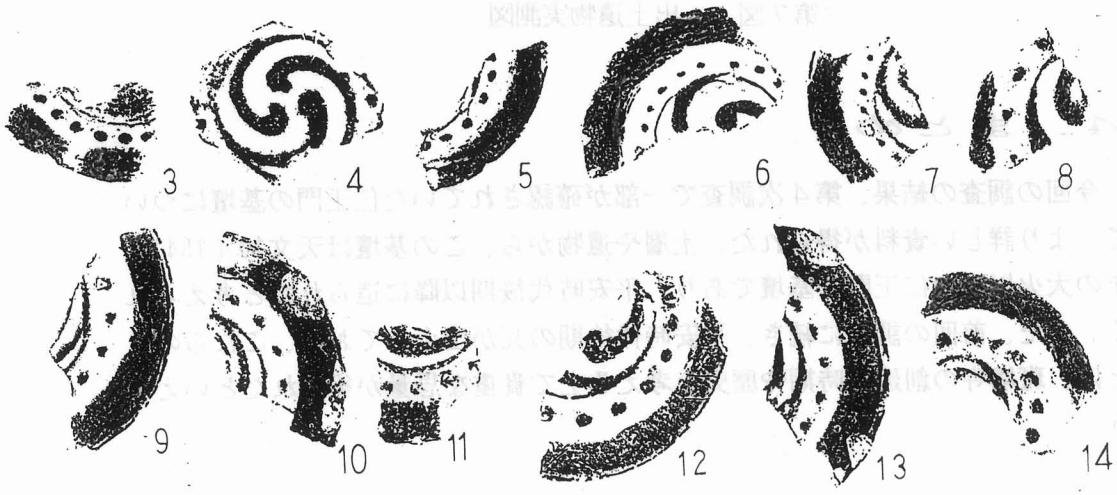
第３図　　トレンチ南壁土層断面図

３．出土遺物の概要

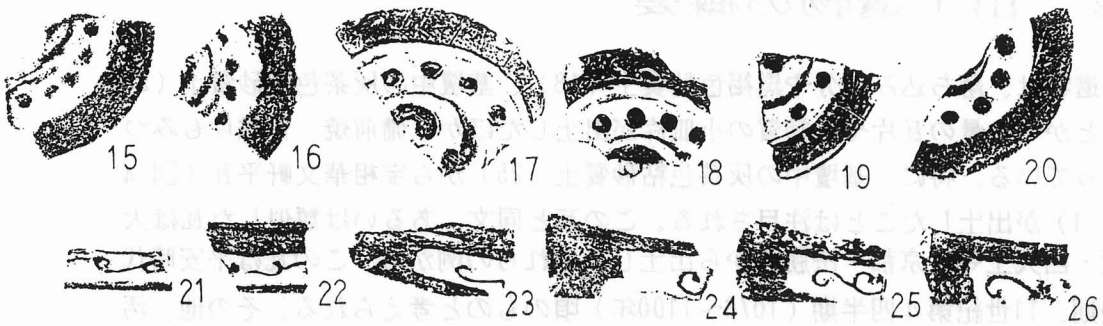
遺物は、落ち込み部分や黒褐色粘質土（18）、基壇中の灰茶色粘砂質土（25）などから多量の瓦片や土師質の小皿片が出土したほか、備前焼・青磁片もみつかっている。特に、基壇中の灰茶色粘砂質土（25）から宝相華文軒平瓦（図 4 の 1）が出土したことは注目される。この瓦と同文、あるいは類似した瓦は大阪・四天王寺、京都・法勝寺から出土し、それらの例から、この瓦は平安時代後期、11世紀第４四半期（1076～1100年）頃のものと考えられる。その他、汚れた灰褐色粘質土（15）から「□□上庄寺之頼□□」とヘラ書きされた丸瓦片（図 4の 2）が出土している。



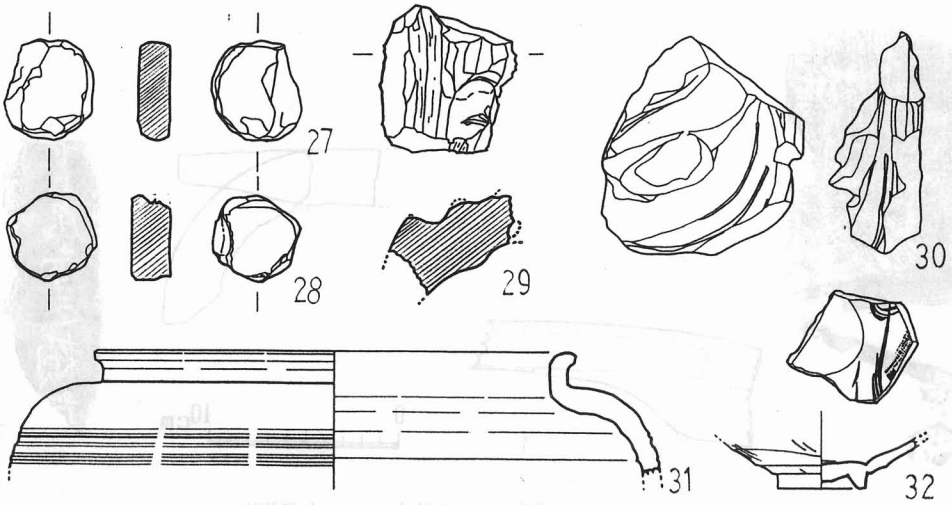
第４図　第25層出土遺物拓本・実測図



第５図　　出土遺物拓本Ⅰ（軒丸瓦）



第６図　　出土遺物拓本Ⅱ（軒丸瓦・軒平瓦）



27.28 めんこ　　29.30 鬼瓦片　　31 壷（備前焼）　　32　小皿（青磁）

第７図　　出土遺物実測図

４．まとめ

今回の調査の結果、第４次調査で一部が確認されていた仁王門の基壇について、より詳しい資料が得られた。土層や遺物から、この基壇は天文10（1541）年の大火以前の仁王門の基壇であり、平安時代後期以降に造られたと考えられる。また、前回の調査に続き、平安時代後期の瓦が出土しており、これらのことは、斑鳩寺の創建の時期や歴史を考える上で貴重な思量が得られたといえよう。

附載Ⅰ　斑鳩寺の歴史を語る古瓦（一）・（二）

（広報『たいし』昭和63年9 月10月号「ふるさと史話」18.19 より）

ふるさと史話（18）

（題字は陸井町長）

斑鳩寺の歴史を語る古瓦（一）

昨春、太子町教育委員会の発掘調査によって、斑鳩寺の仁王門付近から若干の古瓦類が出土しました。その中に、斑鳩寺の歴史――特に創建の年代を探る手掛かりが潜んでいると思われるので、取り上げて検討してみましょう。

第一の古瓦資料は宝相華文を施した軒平瓦で、破片を含めて三点があります。いずれにも花菱文と、それを半截したいわゆる半截花文とを交互に配置しています。この種の瓦当文様は、平安時代の後期に流行したものの一つで、近時の研究によりますと、その源流は朝鮮の高麗系瓦当文様に求められると書われております。

花菱文＋半截花文軒平瓦の類例としては、かの四天王寺から出土した数例がよく知られています。『四天王寺図録古瓦編』（昭和一二年刊）によると、それらには文様の小異があって三種（仮りに①・②・③とする）に分けられ、①→②→③の順序で推移したと考えられます。最終段階の③は、花弁の形式化の著しいことを特徴としており、これと斑鳩寺例とが同文かつ同笵であることは確実視されています。

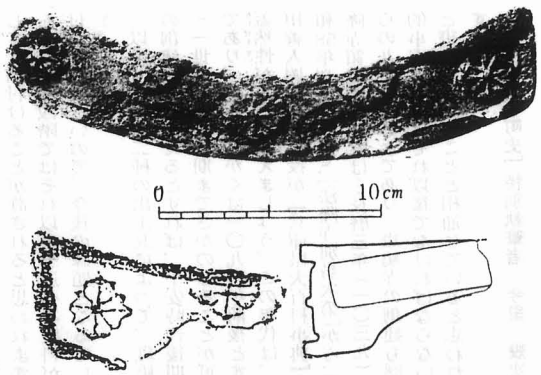
しかし、これらの資料だけでは斑鳩寺例が花菱文系軒平瓦の編年上に占める位置はわかっても、その実年代を定めることは困難です。ところが幸いに法勝寺から斑鳩寺例の直前、すなわち四天王寺②例と同③例との中間に相当する軒平瓦が出土することが、『古瓦図鑑』（昭和五年刊）に掲載されています。法勝寺は京都市左京区岡崎の地に、六勝寺の最初として建立された白河天皇の御願寺で、承暦元年（一〇七七）に落慶供養されたと記録されています。したがって、この法勝寺例がそのころを上限とするとすれば、その直後に位置する斑鳩寺軒平瓦の年代を、一一世紀の第4四半期（一〇七六～一一〇〇）あたりと考えてもよいでしょう。

斑鳩寺軒平瓦と四天王寺③軒平瓦とが同じ木型を使って製作されたとすれば、その生産地をどこに求めればよいのでしょうか。結論から言うと、播磨産であろうと推測していますが、その根拠は瓦の製作技法にあります。斑鳩寺例は三点とも、いわゆる曲線顎の部類に属し、その重厚な作りは古来からの伝統を守っているように見られます。しかし、完形例では認められなかった瓦作りの手法が、図示した破片の断面からうかがうことができます。このような平瓦の端部を、瓦当の裏に差し込んで軒平瓦を製作する播磨特有の技法を「包み込み式」と呼んでいます。ただ、一二世紀に入ってから播磨で盛行する本格的な包み込み式の軒平瓦は、もっと軽快な作りを示しているので、この斑鳩寺例は在来の形態を多分に温存した、いわばその先駆的なものと言ってもよいでしょう。同様の軒平瓦は加古川市井ノ口遺跡から出土しており、これも一一世紀末葉ころと推定されています。

斑鳩寺例を地元の播磨産とすることは順当と思われますが、四天王寺③例をも同類とみることには、いささか抵抗を感じないでもありません。殊に、その瓦当文様が③から②→①へとスムースにさかのぼれるので、立場は逆でないかとさえ思われることでしょう。ところが播磨産の屋瓦が、四天王寺へ搬入された事例は他にも指摘されています。しかしその生産地が神戸市西区の神出窯であることがわかっていますし、その年代が一一世紀末から一二世紀へかけてのころと考えられています。もちろん、これらの軒平瓦はすべて包み込み式による製作です。

こうした現象の背景には、一一世紀後半ないしそれ以降における瓦生産の大きな変革を想定しなければなりませんが、それはさておくとして、先に斑鳩寺軒平瓦の年代を一一世紀の第4四半期あたりと推定したことと相矛盾しておりません。そこで、第二の古瓦資料として「文字瓦」を登場せしめたいのですが、これは次回の（二）において述べることにいたしましょう。

「太子町史」特別執筆者　今里　幾次



斑鳩寺出土の軒平瓦（太子町教育委員会所蔵）

ふるさと史話 (19)

斑鳩寺の歴史を語る古瓦 (二)

(題字は陸井町長)

斑鳩寺出土の古瓦資料の第二は、図示している文字瓦です。これは丸瓦の破片で、凹面にかなり細かい布目を残しています。色調・焼成ともに須恵質のもので、大まかには平安時代後期あたりと考えてよいでしょう。凸面に文字がへら書きされ、次のように判読されます。

□沿五年
□膳久□

まず、右行の年号ですが、下に「沿」の付く年号としては、寛治にはじまり明治に至るまで一八あります。そのうち、平安後期およびその直後のころには、一一世紀に一つ、一二世紀に八つと、その半数が集中しています。しかし、ほとんどは二・三年の短い年号で、五年以上続いたのは「寛治」(一〇八七～一〇九四)・「大治」(一一二六～一一三一)・「文治」(一一八五～一一九〇)の三つしかありません。この中から鎌倉時代に入る「文治」を失格させると、「寛治」と「大治」とに絞られますが、この際は前者の公算が大であろうと思われます。というのは、寛治五年(一〇九一)は、先に当寺出土の花菱文・半截花文軒平瓦を、一一世紀の第4四半期(一〇七六～一一〇〇)と推定した期間の中に収まるからであります。

それでは左行の人名はどうでしょうか。「五」の横の文字が「膳」であることはほぼ明らかですが、その上は全く不明です。その下は下半分が欠失していて、辛うじて「久」と推察されます。おそらく、さらにその下に少なくとも、もう一字あって「膳久□」(かしわでのひさ□□)と呼ばれる人名であった、と考えるのは憶測に過ぎるでしょうか。

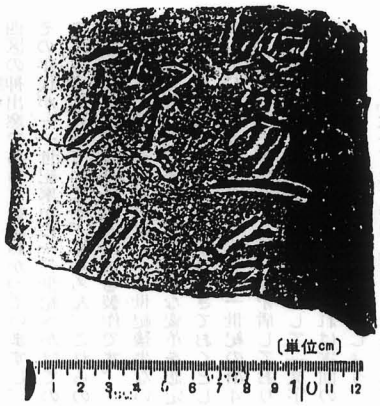
一般に、文字瓦に記された人名は、寺院等の建立・運営に関与する三者、つまり僧尼・檀越・瓦工を表わしているとされていますが、斑鳩寺例の場合はこのうちのどれに該当するのでしょうか。膳氏の肩書が不明である現状では、他の類例を援用するほかはありません。幸いに、こうしたケースに適合する資料が、加西市の法華山一乗寺から見付かっていますので取り上げてみたいと思います。

一乗寺の文字瓦は三点(仮りにA・B・Cとする)あって、いずれも国宝の三重塔に葺かれていたもので、県の指定文化財になっております。資料A(丸瓦)には、「額田部武末 承安肆(四)年才次甲午八月四日」とへら書きされ、「承安元年」(一一七一)の紀年銘のある伏鉢を載せた三重塔の建立年代を支援していますが、人名の性格については肩書がなく明らかではありません。ところが資料B(丸瓦)には、「僧仁増 願主額田部武末」が、資料C(平瓦)には、「宗瓦施人奉 願(願)田部武末」が、それぞれへら書きされていて、この三者を総合すると、「額田部武末」が「願主」であったことが明白となるでしょう。ちなみに、文字瓦に僧尼の人名を記す例は、この一乗寺資料Bにも見受けられますし、また瓦工のそれも少なくありませんが、後者は中世以降の事例が多いようです。

このような傍証資料から類推しますと、斑鳩寺文字瓦の「膳久□」も、いわゆる願主として性格付けることが許されると思われます。しかし、現段階ではそれ以上を述べる史料が見付かっていないので、今後の課題となるでしょう。

以上、今回の二種の出土瓦によって、斑鳩寺の創建年代を考えるとすれば、平安時代後期の一一世紀第4四半期までさかのぼることが可能であり、さらに細かくは一〇九〇年前後とする蓋然性が高いと言えましょう。この年代は、石田善人岡山大学教授が『兵庫県大百科事典』(昭和58年刊)において、「法隆寺別当次第」から、「法隆寺領鵤荘の成立は…長暦三年(一〇三九)からの九年間のことであり、斑鳩寺の創建も歴史的事実としてはそれ以後でなければならない」と書かれていることと相通じていると思われます。

「太子町史」特別執筆者　今里　幾次



斑鳩寺出土の文字瓦
(太子町教育委員会所蔵)

写真１　発掘調査作業風景

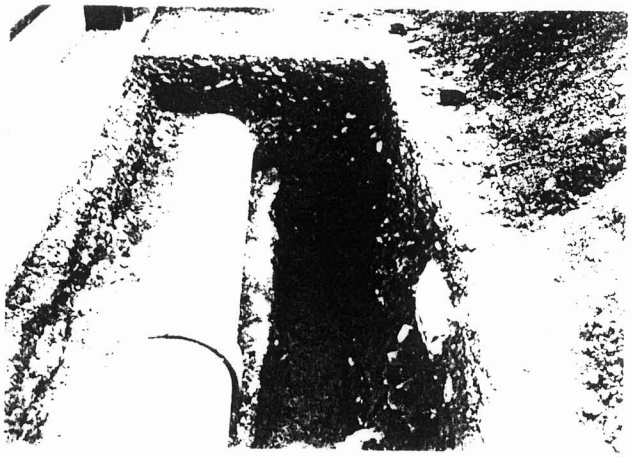


写真２　トレンチ（西から）

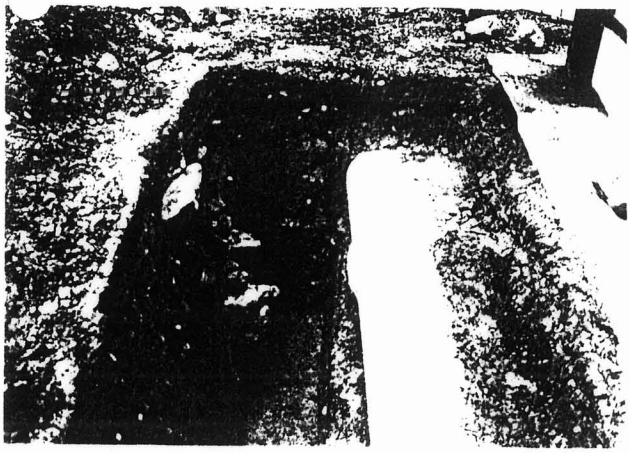


写真３　トレンチ（東から）

写真４　トレンチ南壁面（西部）

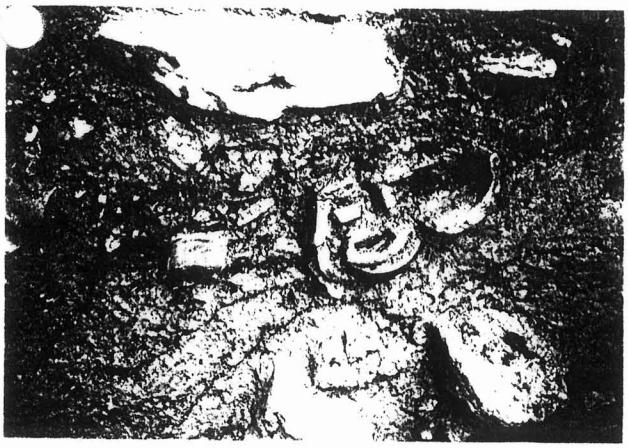


写真５　遺物出土状況

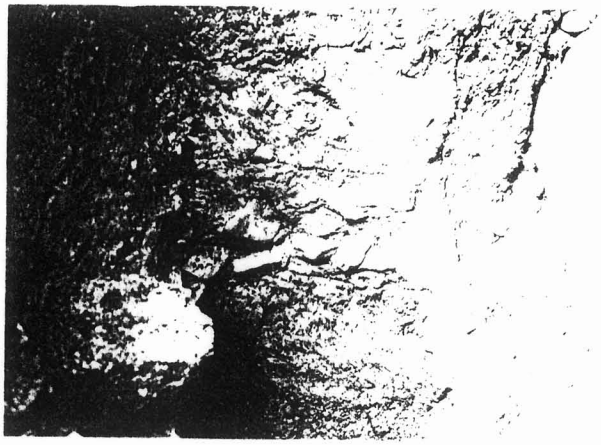


写真６　トレンチ西壁面